

第1章 世界の米需給動向

1 最近の世界のコメ需給動向

伊 東 正 一

はじめに

世界の米需給動向について、私の知るところをご説明させていただきます。きょうお配りしております資料のいくつかは、最近、幸書房から出版された「新版・米の事典」（2008年）の中で私が分担執筆したものです。これに2009年までのデータを含めながらご説明させていただきます。

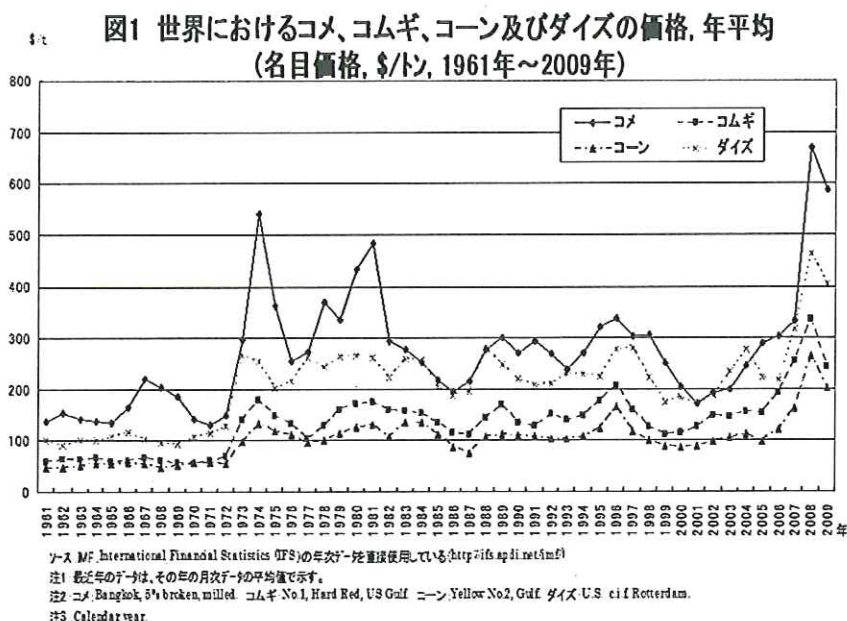
本日の細かい話題の構成は、「1. 世界の主要穀物の生産量と国際価格の推移」、また、昨年を中心に原油価格の乱高下がありましたが、それに関して穀物価格がどのように推移してきたかという「2. 原油価格乱高下と世界の穀物価格」、「3. 世界のコメ生産予測値の変化」、「4. 世界のコメ需給の見通し」、などです。4の需給見通しの1つのポイントとしては、さらに3点、「1. 単収増加の潜在性」、「2. 原油価格との関連性」、「3. 穀物価格の予測」について報告します。それらを踏まえて「5. 結論」を述べます。

まず、少し宣伝になりますが、コメなどの10年以上にわたってデータを出しているホームページを私たちは持っています。そのトップページは、「一緒に世界をみませんか…」というものです。ここに世界のコメ、コムギ、コーン、畜産物に関する世界 200か国ぐらいのデータを出しております。もとのデータは、USDAのもので大量なデータにのびりますが、毎月更新し、みやすい形に編集しています。ホームページの下の方に国際価格等を入れております。毎月の価格を月ごとに入れているわけですが、上は「世界の食料統計」となっていて、コメやコムギ等に分類して集計しています。みやすいことが1つの利点かなと思います。よろしかったら一度ご覧いただければと思います。

市場価格に影響を受ける世界の穀物生産

さて、国際価格の動きを過去50年間でみますと、昨年についてコメは年間平均1トン当たり700ドル近い価格になっています。また、ダイズ価格もコメと同様な推移になっています。最近、また下がりつつありますが、値上がり前の時期と比べてまだ高い数値で推移しています。私は講義でこの国際価格の推移をよく使うのですが、70年代の動きがありまし

て、その後、図1に示されるように価格が安いときがあります。上昇、下落を繰り返しながら、2000年前後に非常に値段が安い時期がありまして、その後、原油価格との関連もあって、少しずつ価格が上がっております。



過去の価格と比較するときは実質価格で

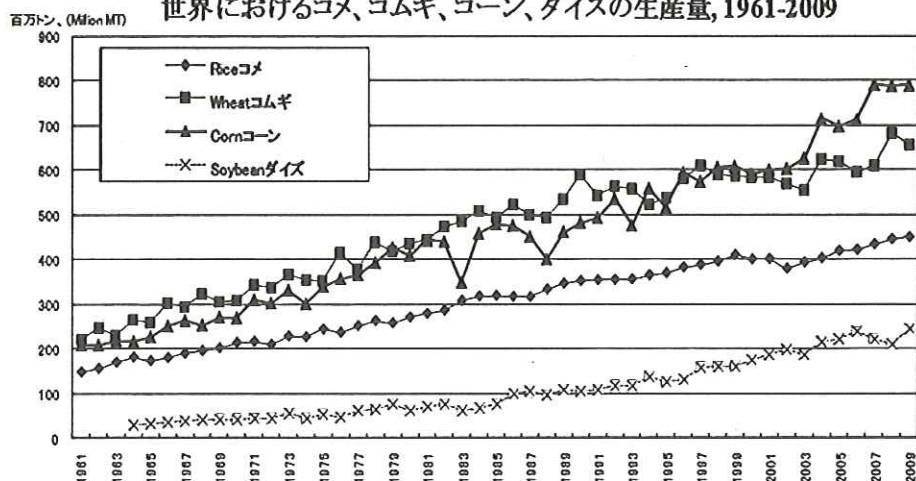
昨年2008年は価格急騰で大変でしたが、私は70年代前半と昨年と一体どっちが大変だったんだろうかという質問を学生にはよくするわけです。学生はこの70年代にはまだ生まれていませんので想像するしかないのですが、2008年前半のほうが高いから70年代前半は余りたいたことなかっただろうという学生も多いわけです。しかし、我々が歴史的な価格変化をみる場合、実質価格でみると現実をより理解しやすくなります。この実質価格は全部ドルによりますが、アメリカの物価指数を逆算して、現在の貨幣価値でみます。そうすると、例えば1974年当時の価格は、実質価格からすると精米1トン当たり1974年は年間平均で2,500ドルちかい価格でした。2008年の高騰時の価格より3倍強もしていたわけですね。ですから、この当時がいかにひどい状態であったかがわかります。実質価格でみるのがすべてではありませんが、一側面としては、当時は飢餓のために死んだという人たちも多く報告されました。そういうことからすると、2008年の価格の値上がりというのはそれほどたいしたものではなかった、ということが理解できます。

もう一度、名目価格でみますと、このように上がったたり下がったりしているわけです。

このように90年代後半は高い価格で推移して、その後、また低い価格になります。そういう意味では、コムギ等の生産者にとっては世界中で非常に苦しい時期であったろうと考えられます。

次に、過去50年間のコメ、コムギ、コーン、ダイズの主要穀物4種の生産量の動きをみますと、60年代はコムギの生産量が一番多くて、2億トン前後でした。それから、トウモロコシとなります。ところが、1990年に史上最高の生産量を示してから、7年間それを乗り越えることができなかった。その1997年の最高記録の後もまた7年間は乗り越えることができなかった。その間にトウモロコシの生産量はプラスの伸び率を示している。これは、なぜかという、コムギのほうは、価格の低迷に打ち勝つことができなかった。打ち勝つためには生産コストを下げるのが課題になるわけですが、コムギはそうはなっていない。結局、コムギは価格低迷による減産を強いられた。世界の農家はどこでも同じですが、価格が下がると採算に合わない農作物は生産を少なくしてほかのものをつくりたくなります。そういう状況があります。

Fig. 16. Evolution of world total production for rice, wheat, corn and soybeans, '61-'09
世界におけるコメ、コムギ、コーン、ダイズの生産量、1961-2009



Source: S. Ito, World Food Statistics and Graphics (<http://worldfoodapion.or.jp/>), Kyushu University, Japan July 2009.
(Original sources are from ERS/USDA, PSD Online). Note: Rice is milled basis.

ところで、きょうの話題はコメですので、コメの問題に移りますと、コメもコムギと同じような傾向がみえる。特に1999年に生産量が史上最高を記録してからは、結局コムギは

7年かかりましたが、コメの場合は6年かかったわけです。2005年になってようやく99年の最高を上回ることができた。それも、極めてわずかにしか上回ってはいないという状況です。やはり価格が下がると当然ながら生産も落ち込んでくる傾向があります。

その一方でダイズですが、一挙には生産量が伸びていない感じもありますが、伸び率はダイズが一番高いわけです。ここ20年間ぐらいで世界の生産量は2.5倍ぐらい伸びているわけで、そういう動きはほかの穀物にはみられません。そういう意味では、ダイズは非常に成長の早い作物といえると思います。

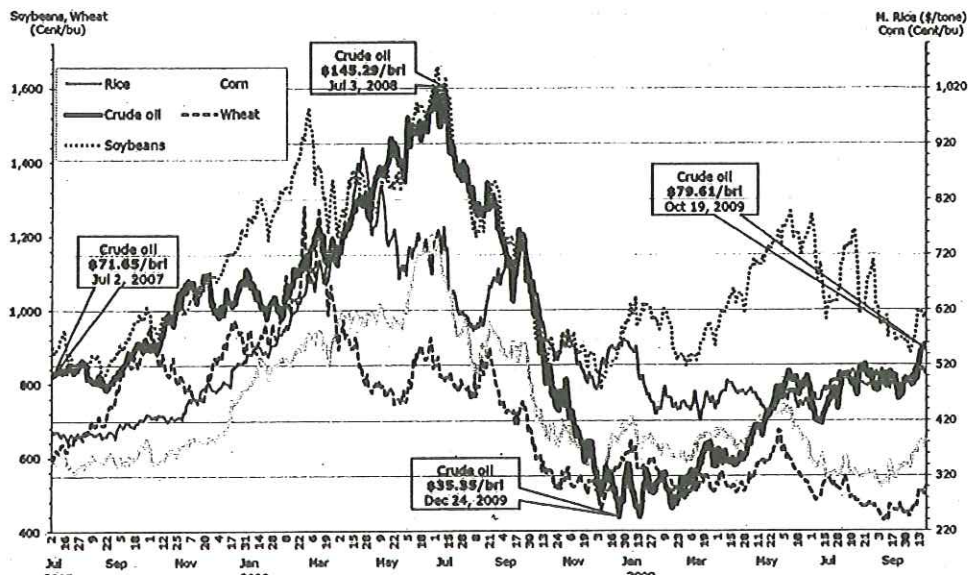
原油価格に“直結”する穀物の国際相場、コメも同じ

価格の動きですが、近年の世界穀物の価格の動きには非常に大きな特徴がある。それは、トウモロコシを中心に燃料に使うことになったからだといえます。実は私、留学生にデータを集めるようにいっており、これは毎日のデータをアメリカの相場から拾ってきているデータです。2007年7月2日から、つい先日の10月19日まで収集しておりまして、2年間以上になります。データを収集しているのはベトナムの学生ですが、もうベトナムに帰っています。しかし、帰る前に「お前はこれを続けろ」といって、彼は「わかりました」ということでインターネットを通して続けてくれているわけです。1週間ごとに彼は更新しますが、今でもこのように更新を続けてくれています。

これは原油価格の毎日の動きです。ダイズ、コムギ、コメ、コーンの日々の動きと比べると、その動きが原油と非常に似ていることがわかります。本当に同じようなスピードでダイズと原油の価格が変動している。ここには少し差がありますが、農産物はそれなりの特徴があり、いろいろな変動幅が出てくることは避けられません。しかし、日々の価格の動きとしては、穀物と原油とは非常に似ています。

例えばコムギですが、原油は上がっているのにコムギは——先ほども申しましたように、増産されることは昨年3月ごろにわかったものですから一たん値段は下がり始めましたが、1日の上がり下がり、原油が上がればコムギも上がる、原油が下がればコムギも下がる、というように動いています。

Daily Price Movements of Oil, Rice, Wheat, Corn and Soybeans in the U.S
(Daily Prices, July 2, 2007 - Oct 19, 2009)



Rice prices are reported on original website in the rough rice basis in unit of US\$/cwt. Milled rice price data were calculated from equation: Original data multiplied by 1000/(45.36*0.6) for 1 ton, which implies approximately equivalent to 4-percent-broken milled-rice package for U.S. No.1.
Source: GFT - Online Futures Trading, <http://futures.tradingcharts.com>

次は、統計学的に回帰分析で分析したのですが、「POIL」というのがコメとオイルの価格の関連です。その他いろいろな説明変数を入れています。これがこのたび出しました英語版ですが、「農業経営研究」に出しておりますのでご覧いただければと思います。

ということで、原油価格と穀物価格が連動するようになった。これは当然ながら穀物が原油の間接的な「代替財」となったことを意味しています。そういう関係がありますので、原油価格の動きをみないと穀物価格の動きが判断できない時代になってきたというこ

$$P_{it} = f(P_{oil,t}, X_{si,t})$$

where,

- P_i : Daily prices of food commodities, US\$/cwt for rice, US\$/bu for corn, wheat and soybeans;
- P_{oil} : Daily oil prices, US\$/barrel;
- X_{si} : Other variables, such as dummy and trend variables;
- i : Food commodities; and
- t : Period from July 2, 2007 to August 4, 2008.

Table 2. Results of the regression analysis of rice, corn, wheat and soybeans prices relative to oil prices (Daily data basis)

Variable	Rice	Corn	Wheat	Soybeans
PQIL	0.180 (0.00)***	5.15 (0.00)***	4.41 (0.00)***	10.1 (0.00)***
RDRICQ	-0.341 (0.00)***			
SDYB	0.0340 (0.00)***			
DTHS	3.33 (0.01)***			
SDCRN		-0.700 (0.00)***		
DJANL415		67.7 (0.00)***		
RDRWHT			-26.3 (0.00)***	
SDJL07			-2.00 (0.00)***	
SDA_S07			0.440 (0.00)***	
SDJ_WR09			1.81 (0.00)***	
DEKSTR			156 (0.00)***	
SDSRNSQ				1.99 (0.00)***
Intercept	-4.06	-20.5	490	122
R-squared	0.917	0.930	0.757	0.923
Adjusted R-squared	0.915	0.930	0.752	0.922
No. observations	276	276	276	276

Source: Ito, et al. (2005)

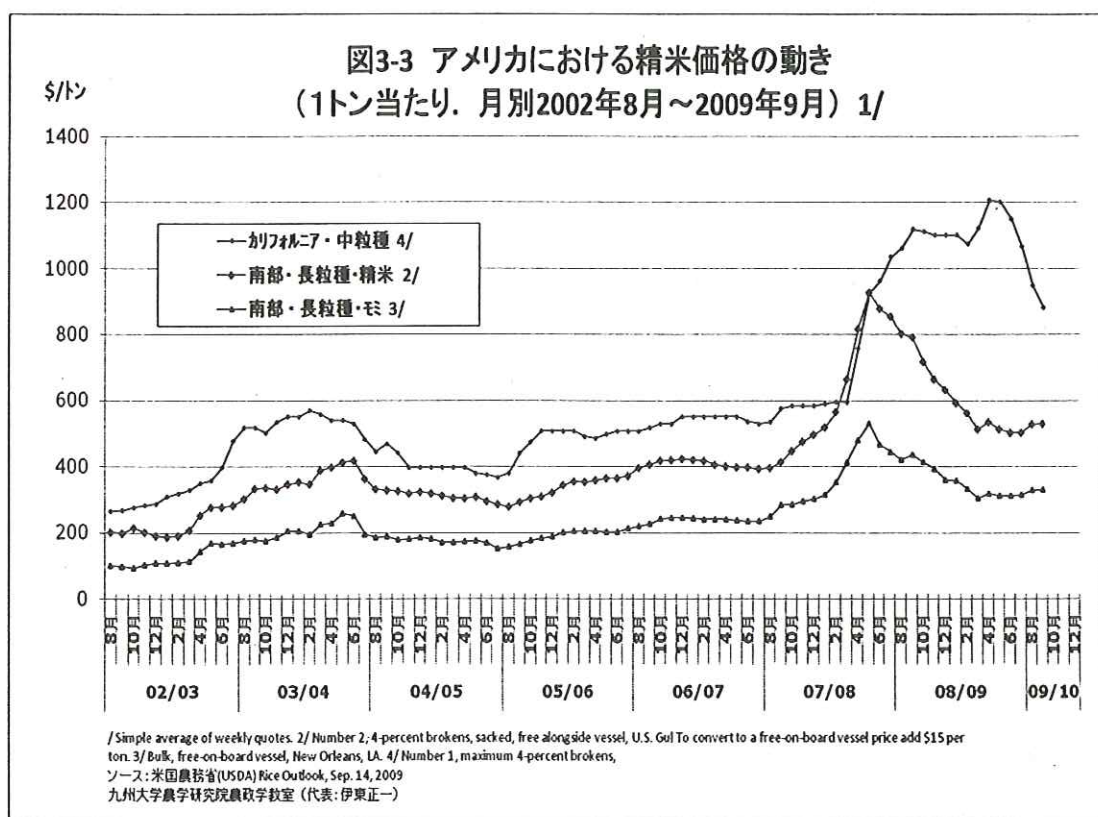
とがいえます。これは、昨年、価格が急騰したときの状況を説明した図ですが、短期的には供給曲線は垂直となります。そこで投機的なマネーが入ってくると供給曲線が垂直ですので、価格も垂直的に急上昇してしまうということになります。ただ、長期的に何年間かの形になりますと、穀物も増産されますので、価格の上昇幅も小さくなってくる。その結果、現在の価格が下がってきているとも考えられます。

カリフォルニア米の価格は日本のMA米輸入がカギ

次の図でみる価格の動きは、アメリカのコメの価格をみたものです。一番上がカリフォルニア・中粒種、その下の赤線が南部・長粒種・精米、一番下が南部・長粒種・モミの毎月の価格です。アメリカの穀物年度は8月から7月までですので、昨年度の8月から今年度7月までのグラフとなります。高かったのが5月前後で、タイの価格も同じでした。昔からアメリカとタイの価格というのは連動しています。お互いに見合って価格設定をしているわけです。

ところで、カリフォルニア・中粒種が南部・長粒種よりも常に高い価格で推移しています。こういった現象は、1995年に日本がコメの輸入市場を開放してから起きています。それ以前は、両者は拮抗していて、あるときはカリフォルニア・中粒種のほうが高い、あるときは南部・長粒種のほうが高いという状況でした。日本が輸入するようになってから、

このように加州米のほうが圧倒的に高い状態になりました。



タイの価格が2008年5月頃をピークに下がり始めると同時にアメリカのアーカンソー州産の長粒種の相場も下がってきたわけですが、しかし、カリフォルニアのコメの価格だけは下がるどころか上昇を続けた。なぜかという、現地ではいろいろな要素がありますが、1つの大きな要素としては、日本がMA米として買い付けることがカリフォルニアのコメの米関係者にはわかっておりますので、あえて値下げする必要がなかったということです。

08年秋になってもカリフォルニアのコメは非常に高い価格で推移をしており、08年の日本の輸入が非常に注目されたわけです。そういった高い価格のなかでも日本は本当に輸入するのかと。実際に日本は輸入したわけですが、その輸入が一段落ついた2009年7月頃から価格も下がってきております。もちろん、ほかのファクターもあるわけですが、日本が与える影響は非常に強いといえると思います。

2008年の穀物価格がなぜこのように上昇したのか。マスコミ等ではいろいろと取りざた

されたのですが、BRIC'Sの食料輸入拡大、豪州の不作、原油の価格上昇と投機、などが原因として挙げられました。先ほどの価格の上がり下がり、特にダイズは中国が非常に大量の輸入を過去十数年間に拡大したのはご存じのとおりです。今、世界のダイズ貿易の半分が中国によって輸入されているわけですが、4,000万トン前後の輸入まで拡大しながらも、その間の価格はそんなに急激に上がったわけではない。また、下がったときもあるわけです。そうすると、BRIC'Sの食料輸入拡大という考えは、私は必ずしも当たっていないのではないかと思います。また、豪州の不作についても、2000年代当初からそういういった不作の現象が出てきていますが、しかし2000年代に豪州の不作が起きてからすぐに値段が大きく上がったわけではない。そうすると、やはり原油の価格上昇が本当に時代を大きく変えた要因であるし、これからもそれは続くと考えられると思います。

先ほど申し上げましたように、世界のコメ生産量は1999年に史上最高まで達してから、6年間その生産量の記録を更新することができなかったわけです。90年代後半は、コメ価格が比較的高い時期でした。日本は1993年が不作でしたので、94年に大幅な輸入をしました。このときの影響も国際価格に出ているわけです。1998年～1999年あたり、正確にいうと98年までですが、この価格上昇によってコメ増産に拍車がかかっていたわけです。90年代後半の1999年まで、毎年2.5%ずつコメは増産されており、この結果、1999年に初めて4億トンを超えたわけです。

それでは、今回の2008年の価格上昇によって何%ぐらいコメが増産されるだろうかということですが、価格上昇の状況をみますと、3～5%ぐらいコメ生産が伸びてもおかしくないとは思っていたわけです。世界のいろいろな予測等や当初の状況をみてみますと1～2%しかコメは増産されないというのですが、そんなものではないだろうとは思っていました。国際相場はコメだけが値上がりしたわけではありませんので、トウモロコシも何もかも穀物全体を増産しようとする土地も十分ないといけないということで、そういうことかなとも感じていました。その後、増産率は上昇し、2008年にはコメは2.83%の増産となりました。これは大きな増産率です。確かに5%にはいかなかったわけですが、2008年の世界の全穀物の増産率は5.1%増になっています（図、USDA: WASDE, October 2009）。ですから、価格上昇はそれぐらいの大きなインパクトを与えるといえるのではないかと。コムギでみられたように、以前は価格の低迷が減産を引き起こしたわけです。

一方で、価格の上昇が人を目覚めさせることは当然のことと思われます。日本農業経済学会がことし(2009年)3月に学会を開いたときには、価格が上昇して心配する声だけが非

この中で特に2008年に注目していただきたいのですが、2008年5月の当初に発表されたときはコメの世界の生産量は精米換算で4億3,200万トン程度です。それが、12月ごろになりますとずっと上向き修正されているわけです。現在は10月で、10月号が先日10月12日に発表されましたが、それをみますと、4億4,600万トンで、2008年産がここまで上方修正されている。ですから、当初出されたデータは、まだどうなるかわからない。USDAもわからないわけです。あるいは、逆にいうと、世界が手さぐりでデータを集めている状況です。収穫時期にきますと、よりはっきりしたことがわかるわけです。しかし、世界全体では、先進諸国だけのデータだけではなく、発展途上国からのデータも多いわけですから正確には集計できないわけです。こうして1年ぐらいたってから、生産量がどんどん上向きに修正される。ですから、そういう意味でも、価格上昇は実際にはそれぐらいインパクトが大きいことを物語っているわけです。データがどんどん修正されていることを見逃してはいけません。

これは2009年産のデータですが、5月からの新しいデータが入っています。実は、8月の段階で生産見通しが大きく減りました。これはインドの気象状況が少し異常で、それによる減産ということです。これほどの大幅減産は珍しいことです。いずれにせよ、2007年産にしてもデータの修正が生じています。ここまでくれば2007年産の統計はほぼ確定できたかなという感じはします。しかし、それでも時期によって生産量に2%台の違いがあります。ですから、実際には生産量は非常にダイナミックに動いているといえるわけです。

飼料・加工向けのコメ生産が不可欠

次に、「世界のコメ、コムギの需要はどうなっているか？」ということですが、避けて通れない問題として、アジアの1人当たりのコメ消費量の減少があります。ことしのコメ価格もまだ高いのですが、そういう高価格で生産を刺激したとしても、本来的な状況は変わっていない。今のようにコメ需要が「人が食べることを中心にしている限り、一人あたりの消費量は減ってきて、コメを中心に生産しているアジアを含めて農業そのものが深刻な問題に陥るのではないかと思います。

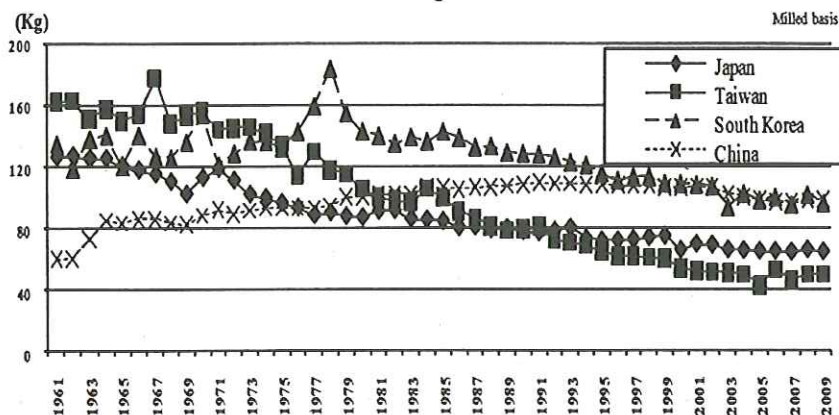
中国は、1990年代には毎年0.3%の割合で一人当たりコメ消費量が減少しています。一人当たり消費量がおよそ100キロぐらいですから、1人当たり0.3キロずつ消費量が毎年減りました。2000年に入りますと、さらにコメ消費は急激に減少しました。その後、コメ消費は上向いてきています。我々も2005年に中国でシンポジウムをしまして、コメ消費が

こんなに減ると農家も大変なことになる、もっとコメを食べる運動をしたほうがよい、と伝えたことがあります。近年、コメの消費趨勢が上昇しているのは結構なことだと思います。中国全体では、人口が多くてもコメの消費量は減るという現象があったわけです。そういう消費趨勢をもとに、将来のコメ需給を我々も予測する作業をしています。

このために、シナリオを3つつくりました。第1のシナリオは現在の減少率が続く、第2のシナリオは減少率が2倍に拡大する、第3のシナリオは減少率が3倍に拡大ということで、2050年まで計測したわけです。これをみますと、コメの一人当たり食用消費量はコムギも同じですが、どんどん減ってきます。これをもとにすると、世界全体のコメ消費量はどうなるか。IRRIは2025年に5億 1,600万トンと予測していますが、とてもそのような水準まではいかないと我々は考えています。もし減少率が2倍になるとしたら、消費量はグラフの赤のところになります。3倍になったら、世界のコメ消費量はほとんど伸びることはない。そういうことを前提にして、我々はコメ政策を考えていかなければいけない。そういう意味では、コメの需要をいかに拡大するかは非常に重要課題になると思っています。

まだコメはエタノール等の原料には直接は余り使用されておりませんが、そうした用途がそれなりに開けたというのは、非常に重要な事だと思います。そうした需要をこれからもどんどん拡大せねばいけない。そうすると食料はどうなるのだという心配がありますが、それにはまたいろいろな可能性があります。まずは需要拡大をしっかりとつくるのが大切だと思っています。このように、消費減退から来るコメの危機を我々は常にみていかな

Fig.1. Per capita consumption of rice for Japan, Taiwan, South Korea and China during 1961 - 2009



Source: S. Ito, World Food Statistics & Graphics (<http://wfd.fao.org/graphics>)
Original data source: USDA, RSD Online, July 2009 USBC, International Data Base, August 2006.

ければいけない。

コメはアジアでほぼ9割以上が生産され、9割近くが消費されている。コムギはヨーロッパや北米を中心に生産され、消費されている。トウモロコシとダイズは北米、南米が主として輸出し、それぞれ地域間で生産拡大の競争が展開されている。現在、世界の穀物生産はどうなっているかというと、コメとコムギの比重が小さくなって、トウモロコシとダイズの比重がどんどん増大しています。これはアジアにすれば農業が衰退することを意味します。北米や南米が農業生産に勝っていつている状況で、アジアにとってはやはりコメ生産が非常に重要で、それがアジア農業の行方に関わっている。そうすれば、やはり我々はこれを看過してはならず、コメ生産をしっかりと拡大せねばならない。

人口爆発は来ない！

ご存じのように、世界の人口の増加率は非常に小さくなっています。これまでの国連の予測では、2050年に92～93億人前後と予想がされています。ご存じのように、人口爆発といわれたのは1990年代の初頭のことです。このときは、2050年の世界の人口は108億人と予想され、人口爆発と言われたわけです。それから、かなり下方修正されています。人口予測には幅があるのですが、その中位の現在の見通しとしては、2150年でも地球の人口は100億人前後とみられています。私は2050年ころには世界の人口が減る可能性さえも十分あり得るだろうと思います。そういう中で、世界各地での農業生産をめぐる国際競争が熾烈になっていくのではないかと思います。

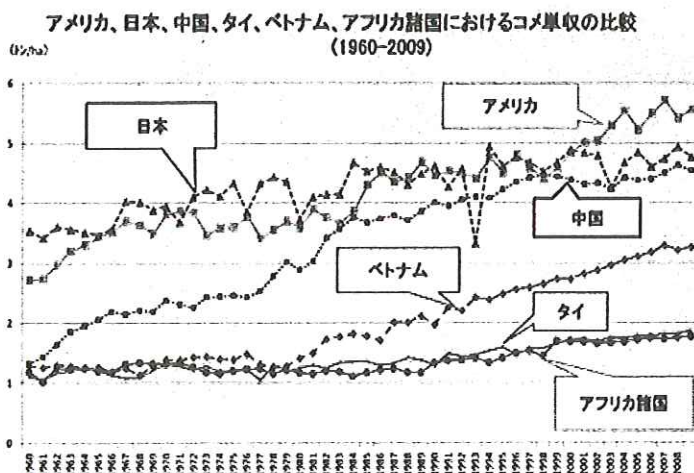
単収増加の潜在性

次は、「過剰基調で推移してきた世界の穀物需給」についてです。コメの単収は、日本ではなかなか上昇しなかったわけですが、今後、世界ではどうなるのか、このことに将来のコメ需給問題は集約されているとみられます。例えば、コメ単収のここ50年間の変化ですが、日本の場合は60年代に非常に高かったが、その後は停滞している。アメリカでのコメの単収は時期を追って上昇しています。結局、これは日本とアメリカでのコメが置かれている状況が違う当然の結果です。ご存じのように、アメリカは政策的に単収を上げたほうが補助金もふえるシステムになっています。農家も単収が高いものをどんどん作付しますから、単収増の動きにつながって、この結果、アメリカの平均単収が1ha当たり精米換算で6トン近くになっている。高いところは8～9トンという稲作農場もカリフォルニアには

出てきています。

ここで特筆すべきは、中国です。図に示されるように、中国の単収は60年代には1トン余とこんなに低かったのが、現在では日本のレベルにまで上昇している。3,300万ヘクタールほどもある広大な水田の全面積で、このように単収が伸びてきている。英語で「リマーカーブル」という表現がありますが、本当に驚くほどの伸びです。

次に、ベトナムです。ベトナムは戦争が終わって以降、コメ生産が急成長を遂げています。



ソース: 伊東正一「世界の食糧情勢」<http://worldfoodexplorer.jp/graph/index.html>, July 2013

一方、タイについてですが、タイの水田面積は広く、全体的に単収は上がっていますが、先進国のレベルには遠く及びません。さらに単収を上げようという動きはあります。実際、乾期に雨が降らない地域でも灌漑ができるところなどは、先進国並みの単収のところも出てきています。

それからアフリカ諸国です。土壌条件が完全に悪いとかいうことは決してありません。私もマダガスカルに行きましたが、同じ地域でも一生懸命やる農家は単収が非常に高くして1ヘクタール4～5トンほどの収量がありますし、一生懸命やらない農家の単収は低いわけです。あつた貧民国でも、農外収入に依存しがちです。農外就業による現金収入が得やすいからです。そういう人たちが、コメなどの農業生産はもうかるのだという意識になれば、状況は大きく変わると思います。

日本も、アフリカのコメ生産を今後10年で2倍にするような技術援助をしておりますが、やり方が適切であれば十分可能であることを中国やベトナム等の事例が示しています。そ

いう意味では、コメの増産については、世界中で本当に真剣にやればいくらでも増産が可能ではないか。決して簡単なことではありませんが、インセンティブをしっかりと与えれば、増産が可能であると考えられます。

コメ、コムギ、ダイズ、オオムギの単収の変化と、生産についての次のデータをみますと、作付面積については余り上昇していません。単収が上昇しているために生産量が増大していますから、我々は今後の方向性を悲観するのではなく、可能性というものを十分に考えながらコメの生産見通しをする必要があると思います。

コメは価格に押されて世界中で増産へ

コメの潜在的増産地域についてですが、まずは南米が非常に大きいと感じております。南米は、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ウルグアイなどですが、畑作部門（水稻を含む）の収益性が増大すれば、生産はそちらにシフトします。収益性が低下すると、肉牛などの放牧に農地を利用する状況ですので、穀物価格が上昇して収益性が増大すると南米での穀物増産は相当なものになると感じています。アフリカも同様です。アフリカの人たちがまだまだ真剣に農業に取り組める状況になっていない。もしそのような状況になれば、ここでも大幅な増産になるでしょう。

もちろん、アジアでもいろいろな国々がまだ農業開発をしたいとの大きい意欲を持っています。カンボジアから帰ってきたところですが、カンボジアでもまだまだコメを増産したいとの意欲が強く、その可能性は十分にあります。また、ミャンマーも、いわゆる盆地的な地形の地域がたくさんあって、先進国からの投資があれば農業開発したいということを政府関係者は語っています。アメリカにしても、まだまだ増産の余地が大きいと思います。

それでは、一体どこまで穀物の単収は伸びるのかということです。トウモロコシの単収は、現在、アメリカで1 ha当たり10トン前後になっていますが、アメリカではもう増産できないという危惧を抱く見解は1970年代末から出始めていました。しかし、その後もずっと単収が上昇しているわけで、限界がどの辺にあるのか、つかみにくい状況です。

コメの価格が上昇すれば、資金が余っているサウジアラビアの投資などでインドネシアでもコメが輸出されるようになるかもしれない、そんなことも言われています。

食糧危機は来ない！

次は、「食糧危機は先進国には来ない！！」についてです。

結局、コメの需要をしっかりと考えなければならない。先ほどごらんいただいたように、コメ、コムギ、コーン、ダイズのなかでは、コメの価格が一番高いわけです。だから、コメは飼料用には使えないし、バイオ燃料にはなおさら使いにくい。何とか生産コストを下げて、いろいろな側面から需要拡大に取り組まねばならない、という感じがいたします。

今後の見通しとしては、何もコメに限りませんが、やはり価格が高ければ高いほど生産量は早く拡大することになります。

そして、近年の穀物価格は原油価格に影響されるところが大きいことです。では、原油価格は今後どうなるのか。これはだれにもわからないわけです。原油の専門家もはっきり分らないわけですから、我々は一層よく分らない。原油価格に農産物価格も影響されますから、このところの見通しが一番難しいと思われます。

見通しにくいのですが、原油価格がさほど下落しなくても、農産物価格の下落幅は大きい。何故そうなるかと言え、余り難しい問題ではなく、農産物は有り余るほどあるわけです。原油は腐ることはありませんが、農産物は大量に収穫され、それが消費で吸収されませんと、品質が落ち、いずれは腐ってきますので、そうすると価格は下らざるを得ない。そういう意味でも、バイオ燃料に食糧を使うことは現実的に大きな問題にはならない、農業にとってはむしろプラスだと、思います。

先ほども言いましたように、人間の食べ物が主体となっているコメとコムギは、原料用にも使用されるコーンやダイズと比べると今後の価格下落幅は大きいのではないかと、この印象を持っています。

コメ貿易は「薄い市場」か？

次は「国際のコメ市場の課題」ですが、これはまた別の機会の話になるかと思われますが、「コメ貿易は未だに『薄い市場か』？」と言われます。実は、70年代初頭にはコメ価格は非常に急騰したのですが、これ以降の価格変動率は他の主要穀物とほぼ同様です。他の穀物の価格変動率と比較すると、むしろコメ価格のほう落ち着いている。その意味でも、コメはもう「薄い市場」ではないと、私はずっと強調してきました。ただし、さすがに昨年2008年のコメ価格の変動幅は大きかった。

コメは主要輸出国が発展途上国であるという極めてアジア的な要素があつて、そういう

点で私は、ベトナムのやり方は非常に汚いと感じています。ベトナムは、自分たちがもうかるために、マスコミ等を使って国際価格を相当に操ってきた、という経緯がある。価格が高騰した2008年にはベトナムが最も得をしたわけで、しかも貿易を国営企業でやっています。民間企業によるコメ輸出もあるのですが、民間企業にはコメ輸出をやらせなくしました。そうして、大変だ、大変だと言いながら、2008年には前年を上回るコメ輸出をベトナムはやったわけです。当然ながら史上最大の“暴利”をむさぼったことになります。ベトナムに代表されるように、コメの輸出の仕方はひどいのですが、それが世界のコメ貿易の現実だといわざるを得ない。それを、今後どうするか、このことに我々も取り組んでいかなければならない。そういった課題を、2008年における各国のコメの輸出禁止の時に我々に示してくれた、と考えております。ただ、最大のコメ輸出国タイと米国はさすがにその限りではありませんで、輸出制限はしませんでした。

日本のようにコメを輸入する国は、主要輸出諸国のコメ貿易の仕方や対応までみて、対外的にきちんと主張しなければならない。コメ貿易の仕組みを日本は、リードしていかなければいけないと思います。そして、コメ貿易の拡大、効率的なコメ貿易ということで、様々な国々が食糧を効率よく運用できる方法を国際的に作っていかなければならないと思っているわけです。これで私の報告を終えます。

